
桜帝学園の秘密

こうき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜帝学園の秘密

【コード】

N2894Q

【作者名】

こじき

【あらすじ】

桜帝学園に入学してきた、苗木徹、そこで出会った、寮の五人。

ごく普通の苗木徹 情報屋名瀬直人 不良？神谷大輔 直人の幼馴染花澤花音 寮母桜井奈央 クールビューティー桐島響子 個性はぞろいの（一名を除く）新入生が一つ屋根の下で暮らす。

苗木はこの寮に住み、三年間を過ごす。

苗木はこの寮で、ドタバタな寮生活があったり、新たな友達ができたり、この学園の謎に迫ったり。

1の秘密 入学式前編

俺の名前は、苗木徹私立桜帝学園なえぎとおる<高校>に今年から、入学する、新入生だ。

学校説明としては、これと言って目立ったところもなく、普通の学校。いわば、地味な学校と言えるだろう。だが、この学校のパンフレットには、書道部だけやたらと熱が入っているらしい、幾度も良い結果を残しているらしい。この書道部にはいるためにかなり遠くから来ている生徒もいるらしい。それだけが取り柄の学校だと思っ……たぶん。

それと、この学校全寮制である。

何で、全寮制にするのか、まったくわからないが、説明を聞くには、生徒一人一人が自立して行ってほしい、と言う願望らしい。

非常に興味がない話だ。勝手にやってくれと言う感じだ。

でも俺がこの学園を選んだのは……両親がかなり、いいや異常なほどまでに薦めてきたのである。

俺は、そこまで薦めるのは、絶対に何かあると踏んでいる。

あの両親は二人とも、昔から変な知り合いが山のようにいるからである。

いずれ、その話はまたどこかですりたいと思う。

そこで、なにがそこでかわからないが、今から俺の自己紹介をしたいと思う。

俺の名前は、さつきも言ったが、苗木徹なえきとあつ。正直に言って何一つ、自慢できるところがない。容姿普通、すべての平均が俺であつてと思う。

自慢できる趣味もなければ、特技もない。

この、学校に入って自分と言うのを探したいと思つている。まあそんな、綺麗ごとを言つても、所詮はただの凡人だ。ヒーローになることもできやしない、ましてや人の命を救うなんてできやしない。

こんな、程度で俺の説明が終わってしまうのは、とても悲しいことである。

そんな、俺が高校生活を送る物語である。今覚えば、なんでこの学校入つたんだらう……。

「えっと、ここが、寮か……」

今日は、入学式の、一日前。寮に荷物を置きに学校へ来たのである。

でけー、さすが全寮制だな。

寮の前へとやってきた。

えっと、03番つと。

あらかじめ、新人生には、鍵が渡されているのである。

寮に入っていき、自分の部屋を探す。

あつた、ここだな。

だがそこには、名前が書いてある、ネームプレートがあるのだが、そこには俺の名前が書いてなかった。

あれね、なんでないんだろう。

戸惑っているところに、身回りのような先生がいた。

あッあの先生に聞いてみよう。

「あーすいません」

「どうしたのかね、どこかわからなくなったかね？」

低めの声で言う。

「あつ、それがですね、鍵を見るとここなんですけど、名前が違ってますよね」

「うーん、どれどれ見せてくれたまえ」

いかにも、先生と言う感じの話かたである。

「あつ、これです」

俺は、持っていた、鍵を渡す。

「……この鍵はね！。実はこの寮じゃなくて、あっちの方だと思
うね」

先生は、窓から、指をさす。

ここじゃない？ もうひとつの方！？

俺は、先生が指をさした方を見る。

俺の目の前に映っていたのは、日本の建物とはかけ離れているも
ので、漫画に出てくるような典型的な城がそこにあった。

例えて言うならば、どこかの国のシンデレラ城を思い浮かべてく
ればいい。

俺が住むのはあそこか！？ この寮で見えなかった、いや正
確に言つと、校舎がありその裏にこの寮、その後ろにあの城だ。

感動している暇も、なかったので、早足に寮へと向かった。

俺が間違えた方の寮が、マンション7階くらいのかなりでかいと
ころである。それに比べてこちらは、二階建ての城である。

せいぜい6人が生活できるくらいである。

ここで、俺の高校生活が始まるんだな……

2の秘密 入学式前編

寮の前に来て、俺は気づいた、この寮の名前は、ミールトリア。略称ミール

何だか、優雅な名前だな。

寮の名前を確認して、俺は中へと入っていく。

その足取りは、重くなぜか緊張していた。

中に入って、まず玄関がある、6つの下駄箱がる。

六人がこの寮に住むのか。

自分の番号に書いてある下駄箱に靴を入れて、中へと入っていく。

右手に階段、左手に食堂と書いてある、部屋がある、奥は浴場と書いてある。

2階が部屋かな？

ゆっくりと階段を上がっていく。

足音だけが階段に響き渡り、すこし不気味である。

二階に着くと、目の前から、1号室から6号室まである。俺は自分の3号室の前へときた。

鍵を取り出して、鍵を開ける。

おっ、開いた。

部屋の中へと入っていく。

中は、以外に広く、キッチン、トイレ、ベット、テレビなど必需品が置いてあった。

以外にいい部屋だな。

荷物を降ろして、ベットに腰を下ろす。

疲れたな……少し仮眠とるかな。

目を閉じると、すぐに眠りに落ちることができた。

どのくらい時間がたったのか、わからないが、一つのインターホンで起きた。

誰だろう？ 起き上がって、俺は玄関へと向かい、ドアを開ける。

開けると、そこに一人の男が立っていた。

「誰ですか？」

「俺は、名瀬直人。この隣、4号室、よろしくね。君は？」

「苗木徹よろしく、名瀬君」

「うんにゃ、名瀬君じゃなくて、直人で良いよ。俺達の仲じゃないか」

「いや、初対面だし」

「これから、仲良くなっていこうよ」。徹ちゃん

直人という男は、かなりなれなれしく俺に接してくる。

別に俺も人とかかわりは、大事にしているが。こいつはなんて
いうか俺の心の中に入り込んでくる感じである。

「……考えておく」

「ひどいッ！ 同じ寮に住む仲なのに、同じ学園の同級生なのに！」

こいつ……めんどくさい。

でも、悪いやつじゃない気がするな。

「わかったよ、俺は名瀬のことを直人って呼ぶよ」

「よろしくね、徹ちゃん。よし、自己紹介終わったし、食堂行
こうぜ」

「食堂？ 何で？」

「見なかったのか？ 荷物を置いたら、食堂来てくださって言う
紙、見なかったのか？ 玄関に書いてあったよ」

紙なんてあったのか、気づかなかったな。

「そうなんだ、気づかなかったよ。行こうぜ」

俺と直人は俺の部屋を出て、食堂へと向かう。

俺はこの寮で、この学園での3年間が始まる。

友達できるかな……もう直人も友達だった様な……。

俺が思うに友達の概念って難しいと思わないか、初めて会う人とうち仲良くなつていったか、覚えているものか。どうやって友達なつたかといわれると、まったく思い出せないものだ。

いつの間にか友達になっている、それが普通だと思う。

「徹ちゃんいい人っぽいよね？」

「そうか？ 直人は面倒くさそうだな」

「褒めたのに酷くね？ ……そう言えば、部活何入るの？」

「部活動……まだ決めてないよ。直人は？」

「俺か、俺は……剣道部？」

「何で、疑問形何だよ」

「まあ、なんだ俺、中学剣道部だしな」

「そうなんだ、意外だったな。直人って部活やってなさそうなのに」

「初対面で決めるのは良くないよ」

お前が言つなお前が。

食堂に、俺達に着くとそこには、俺達以外に二人いた。残り二人だけまだ来ていない。

3の秘密 入学式前編

長い机が真ん中にあり、それを挟むように三つずつ椅子が並んでいる。

今のところ、女子生徒が一人、男子生徒が一人いる。その人たちについては、全員そろったら説明をしたいと思う。

俺と直人はその男子生徒の隣に二つ開いているので、その人の隣に俺、俺の隣に直人が座った。

「徹ちゃんって彼女いるの？」

「彼女？ 居たことないな」

俺は、あんまり女の子と話したことがないから、彼女とか居たことがない。

高校生にもなったんだから、彼女ほしいな……できるかな？

「うんうん。徹ちゃんそれで良いんだよ、俺は昔から決めてたんだ、ギャルゲーで言う、サブキャラのような人になるって。徹ちゃん恋したら俺に言ってね」

ギャルゲーって何だろう、ゲームなのは知ってるんだけどあんまりゲームはやらないからわかんねえ。

「その顔分かってないな。もしかして……徹ちゃんギャルゲー知らない？」

「うん」

「なんてこつたあああああ。お前は人生の99%損してる！死ぬ！」

「お前今死ね言ったな！？そこまで重要なのか？」

直人は、息を切らしながら、言う。

「俺は恋しない、お前は恋をしろ」

直人は自分のと俺を指さしながら言う。

俺は直人に勝手に決められて、恋をすることになった。

恋なんて、自分が気づかないと思うんだよ。

しばらくすると、食堂のドアが開く。

入ってきた人は、開いている椅子へと座る。

直人の目の前の席である。

座った女の人と直人はなぜか見詰め合っている。

「……直人？」

女の人が直人と名前を呼ぶ。

「花音？」

「やっぱり直人だー！」

女の方は席を立ち上がって、大声で言う。

「おお、何だよお前もここの学校だったのかよ。徹ちゃん紹介する、こいつは花澤花音はなざわかのんが沢山名前ついてるけど、本人は、ぜんぜんおしとやかじゃないからな。俺とは、幼馴染みたいなもんだ。中学校は違うんだけど、家が近くだから結構会ってたんだよ。それが同じ高校とは 驚いたもんだ」

「あんた、どんな説明してんの！」

花澤さんは、目の前にあった、コップを直人に投げた。

「ぶっはあー！」

もろに直撃した。痛そうにしているが、ほんの数秒で直っていた。

「で、こいつが苗木徹。俺の親友」

「苗木徹です、よろしく」

「こちらこそよろしくね」

俺と花澤さんは、挨拶をかわした。

「でも、花音と同じ学校とは、驚いたな」

直人が花澤さんに話しかける。

「本当よ、なんであんたがいるのよ」

「ひでーな、おい。お前と一緒に分かってたら グハッ！」

またもや、コップが飛んできて、直人の鼻に当たった。

「一緒に分かったら、何だった？」

「い、一緒にでうっうれしいなッ」

花澤さんは、黙って頷く。

この二人の関係って何なんだろう。

直人には、部活やんないっていったけど、どうしようかな。

直人は剣道部、俺は……野球部とか……無理だ、俺四十肩だ。

なら、サッカー部かな、俺常時捻挫だから　　嘘だけどね。

しばらくすると、食堂のドアが開く。

最後の一人が入ってくる。

4の秘密 入学式前編

扉の開く音、その音で俺達五人は、黙る。

入ってきた、女の子は開いている椅子に座る。

「それでは、皆さん集まったことですので、自己紹介でもしましよ
うか」

一番最初からいた女の子が仕切る。

この雰囲気ですべて仕切ることができるのは、すごいな。

俺なら絶対に、無理だと思ふな、直人ならできそうなのにな。

「えつとですね、私から切り出したんですから、私から自己紹介を
しますね。桜井奈央さくらい なおです。今年から、この寮の管理人になりました。
学園の先生で担当は国語です。料理も私が作りますね」

外見は、身長はとても小さく、先生とは思えない姿である。整つ
た顔立ちで、とても美しい。でも、あまり発達がよいとは言えない。

この人が管理人……かわいい、いや可憐だ！

「お前今、かわいい、可憐だっと思っただろ」

直人が俺に言ってきた。

「なッ何言っただよ、おッ思っわけないだろ！」

「なんで、そんなに焦ってんだ？ 徹ちゃんわかりすぎだよ」

俺ってそんなに分かりやすいのかな、そういう、直人って何考え
てるかわかんないよな。

「それじゃ、次は君ね」

桜井先生は、自分の前の席の人に言う。

「かみやだいですけ
神谷大輔よろしく」

とても短い説明。

それだけじゃ、伝わらないので、俺が補足説明したいと思う。

身長は、俺達よりぜんぜん高い、たぶん180くらいある。俺達
がたぶん170位だ。

それで、顔も怖い。なんかヤクザみたい。でも高校生というのは、
分かる顔だと思う。

「あ、ありがとうございますね。それでは、次はあなたね」

花澤さんに桜井さんが言う。

「あつ、はい。えっと、花澤花音です、そこにいる、直人とは幼馴染
です。これから三年間、よろしくお願いします」

花澤さんは、直人を指を指してから、お辞儀をして自分の席へと
着く。

花澤さんは、身長はなかなか高く、俺達より少し小さいぐらいで、女性にしては身長が高くスタイルが良いといえるだろう。

「はい、よろしくね。次はあなたね」

先生は、直人に言う。

「名瀬直人、この学園の秩序を守るために、この学園にきました。

だから先生、俺に生徒の個人情報を書いてある紙を見せてください」

「一体それを何に使うんですか？」

「商売です、絶対駄目です」

「そこを何とか！俺の……俺の青春を返してください！」

「何を言ってるんですか、駄目に決まっているでしょ！」

直人はなぜか引こうとしない、たぶんあの先生だからだと思う。

「わかりましたよ、自分で調べますよ」

「調べても駄目ですー！」

先生は子供ののように、顔を真っ赤にしながら言う。

「はあ、はあ。じゃ次は君ね」

俺の番が回ってきた。

「苗木徹です。皆さんに比べたら、自慢できるところもありませんが、仲良くしてください」

「さあ、次の人に行きましようか」

最後の1人、俺が最も気になっている人。

「桐島響子です、よろしくおねがいます」

改めて俺から、補足説明をさせてもらおう。

整った顔立ちは、キリツとしており、男女両方とも引くような美貌の持ち主である。髪型は肩までの髪型である。

かわいい！ いや、綺麗だ！

「徹ちゃん今、かわいい！ いや、綺麗だっと思っただろ。どっちか一人にしとけよー」

だから、なんで俺が思ったことが分かるんだよ。そりゃあ、二人ともかわいいけど、どちらか一人といえば……まあ、それは後々ということだ。

「直人黙っておけ」

俺は、相手を睨み付けるようにいう。

「でもね、徹ちゃん……そんなに睨まなくて良いよ、怖いよ。あのなー俺はな、無茶はするなといっちょやるんだよ」

「直人には関係ない」

「ひどいなー徹ちゃん」

俺達は、自己紹介を終えて、自分の部屋へと帰ってきた。

後は、明日の入学式まで暇になったな。何ややるっかな。

5の秘密 入学式前編

「自分の部屋には来たけど、何にもすることないな」

現在時刻14時00分、それといってやる事もないので、暇を持て余している。

自己紹介の時、直人には、凄く勘違いされたが、俺はあの二人、櫻井先生と桐島さんを見た瞬間、どっちも好きじゃなくて一人に決まっていた。でも、名前を出すなんて絶対に出来ないから誤魔化したんだよ。

あいつに言うとかからかわれそうだよ。

直人の所行こうかな、なんだかんだであいつとなら、暇になりそうにないし。

携帯電話を取り出して、直人に電話する。いつ番号とアドレスを交換したかというと、自己紹介のときにみんなで交換したのである。

桐島さんと櫻井先生のアドレスと携帯番号……グへへ。

三回のコールで直人が出た。

「あっ直人、今部屋にいる？」

『今か、今は学校に来てるよ』

「何か用事でもあったのか？」

『ちやうちやう、調べ物だよ、徹ちゃんたちのためのね』

「調べものって何だよ」

『知りたいかい、徹？』

いつものしゃべり方ではなく、重く、シリアス調で話す。

そんなに重要な調べものなのか！？

「う、うん」

『そうか、分かった。特別に徹にだけ教えよう、今俺は　　すまん、徹ちゃん、切るわ！』

電話を切られた。

あいつ調べものってなんだろうな、さらに、最後まで変な切り方だったし。

やっぱ、暇なっただな。神谷君に電話してみよ。

「あつ、もしもし、苗木ですけど、今暇かな、暇だったら遊ぼうよ」
『すまんな、俺は今暇じゃないんだ、また今度にしてくれ』

あっさり、切られた。

なんだよ、みんな忙しいんだな。なんで俺は暇なんだろう。

暇って言ったたら、暇を過ごすにみんなは、何をして過ごしているのかな、想像するに直人はゲーム、家でゲームばっかやって家を出てこないとか……ありえるな。神谷君は、うーん、なんだか怖い人だからな、ゲームセンターとか言いそうだよな、これ言ったら殺されるかな。……まさかね。花澤さんは、あの人は、すごく元氣

そうだから、スポーツかな、バスケットか似合いそうだな、俺は、スポーツと言ったら……たぶん物語の要になるからあんまり言えないんだよな。強いて言うなら、あるスポーツをやっていた。桐島さんはどうだろう、文芸部に入っていてそうだな、もしかしたら、この学校の書道部にはいるのかな　俺も入ろうかな。

もう、いいや、テレビ見よう。

リモコンに手をかけて、チャンネルを回す。

この時間面白いものがないな、適当な旅行番組を見る。

そういえば、今年から地上は放送なんだよな、このテレビはもうできてるや。さすがやるのが早いな、家もリビングのテレビはそうだけど、ほかの部屋はまだだったよな、あれって、見れなくなるんだよな、それは困る　てか、俺寮生活じゃないか、関係ないとまではいえないけど、俺がやることではないな。

番組が詰まらなくなったので、ほかの番組が見ようと、リモコンでほかの番組を見ていたら、少し不自然な事を目のあたりにする。

なんで、ニュース番組がないんだろう。

全チャンネルを回しているが、ニュース番組が一つもやっていない。時間帯かもしれないが、まったくやっていない。

何だろう、寮だから見れる番組を制限してあるのかな、でもニュース番組が見れないなんて。

いつもは見ないのだが、見れないと思うと非常に見たい気持ちになる、人間の性である。よくあるよな、見るなよといわれたら無性

に見たくなるあれだよ。あれって何なんだろうな。

テレビもいいのやってないなー。外に出るかな。

そう思ったら、即行動だ。

もう少し、テレビ見たら出ようかな。

それから、俺がこの部屋を出ようと悩んで一時間後に出た。

6の秘密 入学式前編

廊下に出ると、誰も居ない静か過ぎる。

一階へと階段を下りてやってきた、食堂に電気が付いていたので、誰かいると思うい、入っていく。

中に入ると、桜井先生がなにやら食堂で何かをやっていた。

棚の中から何かを探しているようだった。

「桜井先生何をやってるんですか？」

後ろから、声をかける。

「ひゃ！？ 何だ苗木さんですか、びっくりしましたよ」

「すみません、気づかないとは思いませんでしたので。ところで何やってるんですか？」

「調理器具見てたんです。ここは始めて来るところですからね」

「そうなんですか。見つかりましたか？」

「はい。沢山良いのありましたよ。これで皆さんにおいしいご飯作りますね」

笑顔で言う。

天使のような微笑だ。俺は先生がご飯作ってくれるならどんなものでも食べれそうだ。

「桜井先生が作ってくれる料理なら、お代わりどれだけでもできま

す、何十杯いや何千杯食べれます！」

「苗木さん、それは言いすぎですよ」

「いや、本当ですよ」

桜井先生は押し黙ってしまい、頬がうつすらと赤く染まっているのを見た。

桜井先生顔が赤いな、どうしたんだろう、風邪かな、風邪だったら大変だ！

「桜井先生、風邪ですか！？ だったら俺がすべて代わりますから、寝ていてください！」

「えっ、えっ！？ 私風邪じゃないですから、大丈夫ですから」

慌てて、俺を落ち着かせる、桜井先生 かわいい。

「え、そうなんですか、俺の勘違いでしたね。何か俺に手伝えることありますか？」

「手伝うことですか、大丈夫ですよ、苗木さんは作ったご飯を食べていただだけで、本当にそれだけで良いですから」

本当に申し訳なさそうに、桜井先生は言う。

こんなにも、俺を思っていてくれるなんて、嬉しいもんだな。俺も全力で、桜井先生を大事に思いたい。

例え先生が学園側としても

例え先生が誰からも信用されなくなったとしても

例えば先生が学校を辞めなければならなくなった時も

「分かりました、それじゃあ俺は、先生の邪魔をしないように部屋に戻りますね」

食堂の出口へと向かう。

「あの、苗木さん！」

出口へ向かう時に桜井先生とは、思えない声で呼び止められた。

「どっとうしたんですか？」

「あッあのですね、私は皆さんのことを名前で呼びたいと思っているんですけど、いいですかね？」

「全然良いです、いやむしろ呼んでください、奈央先生！」
「えっ……!!？」

奈央先生がすごく驚いている。たぶん俺が奈央先生なんて慣れないらしいことだったからか。

「あッすいません、慣れ慣れしかったですよね」

「いや、違うんですよ、私その驚いたというか、恥ずかしかったというか、その嬉しかったです、徹さん」

かッ……………かわいい、いや可憐だ！ 何度この言葉を言ったか分からないが、奈央先生は可憐だ！ どれだけ言ってもこれを読んで下さっている人でも奈央先生の可憐さが分からないと思うが、思っている、十倍は可愛くて、きれいで可憐だと思ってくれ。

「あッありがとうございます、奈央先生。直人たちもきつと喜ぶと思いますよ」

「徹さん……」

「それじゃ、そろそろ部屋に戻りますね、ご飯のときに行きますので」

「はい。ご飯は自己紹介と時に言いましたが7時ですので、遅れないようにしてくださいね」

食堂から、出て行き、自分の部屋へと戻る。

自分の部屋へと着き、お茶を入れる。

うまい、これにお茶菓子があれば最高だな。お茶があるんだからあるかもな。

戸棚を開けてお菓子があるか確認してみる。中には、ようかんが一つあった。

なんだ、あるじゃないか。

ようかんとお茶を飲み干すとちょうどいい具合の眠気が差してきた。

少し寝ようかな……

ベットへと場所を移動し、目を瞑るとすぐに眠りに落ちることができた。

なんだか、今日は寝すぎな気がするな……夜眠れるかな……

「……きろツ、おきろー徹ちゃん。ご飯だぞー」

んツ誰だ起こしてくれてるのは？

目を開けてみる。

「何で直人が俺の部屋にいるんだ？」

「鍵しまつてなかったよ、無用心だぜ徹。誰も襲わねえけどな」

「そうか、開いてたんだ。でも何のようだよ？」

「ご飯だつて、奈央先生が呼んで来いつてよ」

「もう、そんな時間だったのか、悪い起きれなかった」

「いやいや、別にいいよ俺も得させてもらったし」

「んツ得？ 何が得だったんだ？」

「まあーいいじゃないか、飯行こつぜ飯」

直人は逃げていくように俺の部屋から出て行く。

俺も行くか。

携帯の時間を確認すると、7時20分。

「遅れてすいませんでした」

食堂へと行き、誤る。

「大丈夫ですよ、皆さん今集まったところですから。さあ、食べま
しょう」

自己紹介のときに座った、場所へと座った。

7の秘密 入学式前編

「今日のご飯は、カレーですよ。たくさん食べてくださいね」
「いただきまーす！」

みんなが一齐にいただきますと言い、みんな食べ始める。

「うまい！ 奈央先生うまいですよ、このカレー美味すぎです！」
「そんなあ、普通のカレーですよ」

奈央先生が言いなおす。

「普通じゃないですよ、絶対おいしいですよ！」

奈央先生は押し黙ってしまった。

少し言い過ぎたかな。

「徹ちゃんほめ過ぎだろ、うまいのは事実だけど」

俺と奈央先生の会話を聞いた、直人が入ってくる。

「褒めすぎじゃないぞ、本当にうまい このピリ辛なのが野菜
の甘さが出ており、マッチしたハーモニー 完璧だ！」

「……徹ちゃん……お前カレー評論家か！」

「カレー評論家といわれたら、このカレー三ツ星です！」

「お前しゃべりながらなのに、何でもう食べ終えてんだよ」

カレーのお皿は、もう無くなっていた。

「あつ奈央先生おかわりもらえもすか？」

待つててくださいいねと言い、お皿を持ってキッチンへ行く。

「お前本当に……図太いな。この空気を見てみる」

直人が周りを見渡すように言う。

「空気つて……？」

周りを見回してみた、いや、周りの空気呼んでみた。殺伐とした空気がある、まあ、考えても見れば、今日始めてあつた人だから、何を話していいの分からずに、この空気になつてしまったのか。

「分かったようだな、徹ちゃんお前が浮きすぎていた事に」

注意するように言う直人。

うーん、確かに俺奈央先生のカレーが食べれて、テンションあがつていたのは確かだけど。

「そついえば、今日直人何調べてたの？」

「んゝ秘密」

「何でだよ!？」

「徹ちゃん 優柔不断だもん」

「ちツちがうよ!」

優柔不断なんかでは、ないと思うけどな。

「うっそだあ。なら、奈央先生と桐島の作った料理どっちが食べた
い？」

「そんなの決まってるんだろ……きッいや、なッ……」

「どっちだよ、徹ちゃん」

「そッそんなの決めれるわけ無いだろ！」

ましてや、そのお二人からの料理となれば当たり前だ。

「やっぱり、徹ちゃんは、優柔不断だねー。それが徹ちゃんのいい
ところなんだけどね。俺が調べた結果をご飯食べてからみんなに教
えるつもりだったから、そのときね」

直人は、何面白いことでもいうように言う。

そんなの決めれるわけ無いだろ、食べれるなら二人のを食べたい
よ。

「あのさー、唐突なんだけど、いいかな徹ちゃん」

少し、食べていると直人が話しかけてくる。

いいよと、俺は言う。

「大富豪ってあるじゃない、あのトランプのやつ。あれって大富豪
とか大貧民とか決められるじゃない、勝負の結果で、あれって差別
だよ、いけないよねー」

「でも、そんなこというけどさ、どこの世界にも勝ち負けってある
と思うよ、負けるものもいれば勝つものも、いると思うよ」

勝負の世界に勝ち負けはあると思う、戦争だって勝つ国と負ける

国があるだろ、それで負けた国がお金や土地を渡したりしてただろ、それと同じだと思う。それは戦争だけではなくて、何事にもあると思うよな。

剣道の世界だってそうだ。

「それなら、俺はその差別ってやつを無くしてやるよ！ 全員貧民にしてやるよ！」

熱く、とても熱く無くすと熱弁している。

お前のがこの空気読めてねえよ。

「それじゃ、カードゲームとして駄目になるだろ その差別ってどうやって無くすつもりなの？」

「……大富豪のブログ作るとか」

「大富豪のブログなんて見る人なんていないだろ」

なんだよ、大富豪のブログって。

「例えばブログの名前を有名な芸能人のブログにして、中身を大富豪に付いて語るとかどうだよ？」

「それ、詐欺だよ！ なんだよそれ、芸能人だと思ってみたら、大富豪について熱く語られるってなんだよ！」

どんな、詐欺だよ。ワンクリック詐欺みたいだな。

「何で大富豪って2が一番強いんだろうな、それで1だろ で1 3だよな。なんで1 3が一番強く無いんだ、なんで2なんだよ？」

「知らないよ。作った人に聞いてみてよ」

「あのね大富豪は、確かね……」

俺達の大富豪の話題に奈央先生が食いついて来た。いや食いついて来た、と言う言い方は、ものすごい失礼なので言い換えよう、奈央先生が俺達の話に興味を持ってくださったので、話に入ってきたくれた。

「階級闘争という呼び名について、全共闘運動が下火になった頃、運動を離れた学生の間で本ゲームが流行したが、1ゲームでの順位が高いほど後のゲーム展開において優位に立つことができ、階級が固定化されるという特性が、現実の資本主義社会と類似しているとされ、マルクスの提唱した階級闘争の名があてられたらしいんですよ。また今度、皆さんで大富豪しましょうね」

奈央先生は意外と、博学なのかもしれない　先生だからな。

みんなご飯食べ終えて、食器を片付けて、席へと座る。

「えー、皆さん明日はついに入学式ですね、今日は早く寝て、明日に備えてくださいね」

奈央先生がみんなに言う。

「あつ、少しいいですかね？」

直人が席を立ち言う。

今から直人がさっき言ってた調べたことを言っつて事が。

「どうしたんですか、直人さん？」

「あのですねー、俺自己紹介終わってから、職員室行ってきたんですよ、そこでこれを見つけてきたんですよ」

そういつてみんなに紙を見せる。

「クラス表？」

桐島さんが、答える。

直人が見せたのは明日張り出される、全クラス表である。

「そうなんですよ、桐島さん　これ手に入れるの大変でしたよ、こっそり手に入れて」

「お前それ泥棒じゃないか!？」

俺が席を立つて言う。

「大丈夫、盗んだのは奈央先生のやつだから」

直人が安心させるように言う。

いや、奈央先生のもも駄目だろ。

「えっ、私の!?　返してくださいよ」

「あっどうぞ」

先生に大人しく返した。

「先生そんな大事なものを、机の上に置いておくなんて無用心ですよ、それ俺が少し手を加えましたから」

「何をしたんですか!？」

先生が本当に泣きそうなくらいおどおどしている。

「俺達全員別のクラスだったんですけど、みんな一つのクラスにしておきましたから」

「!？」

直人がした行動にみんなが驚いたと思う。

「本当ですか 本当だ……本物を返してくださいよー」

「大丈夫ですよ先生、ほかの先生も誰も気づいてませんから」

「そういう問題ではありません!」

「うーん、残念ながら、本物はもう廃棄させてもらいました、てへっ」

「てへっ、じゃないです、直人さん!」

「もぉー先生、いいじゃないですか、俺達と同じクラスのが何かと都合いいでしょう」

「……」

奈央先生は押し黙ってしまった。

あーあ、奈央先生黙っちゃた 直人の勝ちだな。

「そんなに、奈央先生をいじめんなよ、直人」

俺が注意するように言っ。

「でも、徹ちゃん、俺達がおんなじクラスなんだぜ、俺や桐島ちゃんとも」

そうか、桐島さんとも同じクラスのなんだな、桐島さんって見て
いるだけで、嬉しいっていうか 見ているだけでいい、高嶺の花
って感じなんだよな。まだ話すらしてないし。

「なツ仲良くなれるかな？」

「もちろんだよ、徹ちゃん！ 全力で俺がフォローしてやんよ」

「直人、苗木、私たちもいるんだよ！」

花澤さんが、自分たちもいることをアピールする。

忘れてた、桐島さんや花澤さん奈央先生もいるんだった。て
つきり俺と直人だけで話してるかと思っちゃった。

「さあ、もおこの話を終わりにしますよ」

奈央先生が言う。

「はい、じゃ新入生は自分の部屋にと戻るとしますか」

直人が先頭を切って食堂を出て行く。それに続いて俺達が出て行
く。

自分の部屋へと着く。

「そう言えば、風呂まだだったな 入りにいくか」

少し、部屋でのんびりしてから、浴場へと向かう。

浴場は男と女と別れて、中はまあまあ広い温泉であった。

すげーな、温泉まで付いてるなんて、本当に城みたいだな。
今日は早めに寝るかな。

温泉からはすぐに出て、自分の部屋へと戻る。

12時か寝るかな。

布団に入り、眠気を来るのを待つ。

ほんの少しで、眠りが来た。

長かった1日も終わった、明日からこの学園に入学するな、
楽しみだな。

8の秘密 入学式前編（直人編）

この物語は、番外編と考えるともらいたい、主人公は徹の新朋友、名瀬直人がお送りします。

俺の説明をしようかしないか、悩んだところ徹ちゃんがしてくれてると思うから、俺からしないよ。

ついに俺が語る時が来たか、徹ちゃんみたいに主人公みたいにはいけないけど、俺は俺で頑張って行きますとしますか。

俺が主人公だからって、読むのをやめるなんてしないでくれよ。俺だって徹ちゃん並に恋愛したり、学園の謎を解いたり、悪魔と戦ったり、神と戦ったり、サイヤ人と戦ったり、青いタヌキと戦ったり、吸血鬼戦って自らが半吸血鬼になったりしないように 嘘だけだね

時系列的に言つと、徹ちゃんが寝た時から始まる。なんで分かるかって？ それは秘密だよ。

みんなで食事を終えて、自分の部屋へとやって来る。

「暇だなあ……寝るには、まだ早いしな、ゲームやるっかな」

家から持ってきたのは、携帯ゲーム機と置き型ゲーム機とパソコンぐらいかな。これがあれば、生きていけるよね。

部屋に着信音が流れる。

「ん、メールか誰だろうな」

携帯を開いて、メールを確認する。誰かは、秘密だなしいて言うなら情報を共有している人だな。

学校に行けば面白いものが見れるって言うことが書いてあった。

やることも決まれば、即行動だ。さっそくジャージに着替えて、学校へと向かう。

玄関へとやってきた。

「あれ、直人こんな時間からどこ行くの？」

花音がジャージ姿で俺に話しかけてきた。

「よお、花音こそどうしたんだよ」

「私は、ちよっと走ってきただけだよ」

「そうかそうか、えらいなー。じゃ、俺はこれで！」

逃げるように走っていく。

どうせ、連れてってーとか言うんだろ。

「待ってよ、直人こそどこで行くの？」

「ふっ、俺は少々旅に出かけてくる」

「じゃ、私も付いてくね」

「何だよー！」

「面白そうだから」

ばれたか。

「わーたよ、学校から行くからな」

「うん！」

明日から4月なのでそろそろ暖かくなってくるかと思うんだけど、まだ夜だから寒いな。

「花音どん位走ってきたんだよ？」

「うーんとね、軽く五キロぐらいだよ」

「いやいや、軽くじゃないから、五キロって」

「えーそうなの。……直人ってどうしてこの学園来たの？」

「どうしてって言われてもな……別にそんなにたいした理由は無いけど」

「ふーん、私も適当なんだよね　それで直人と同じ学校に入れるなんて、本当にすごいよね。お父さんお母さん知ってたのかな」

「さあな、分かんないけど、知ってたんじゃないね」

うちの親なら、知ってても教えなさそうだよな。

「だよなー、隣の家だもんね　中学のときも話はしてたよね、そ
うちの学校はどうだとか」

「そうだったっけ？」

「そうだよ」

そんな話もしたっけな。まったく覚えてねえや。

「でも　また花音と同じ学校楽しみだわ」

「直人……」

うつすら頬が赤くなっていた。

「顔赤いぜ、花音」

「えっ、あっそうこれは、走ってきたからねだよ」

「そかそか、大変だっただろう。ジュース奢ったるわ」

「えっ、いいの！ じゃ、オレンジジュースよろしくね」

「へいへい」

花音と最初に自動販売機へと向かう。

この学校は、自動販売機が一つの場所にあり、そこにはかなりの種類の自動販売機がある。

「なあ、花音これ見てみるよ」

指を差した先にある自動販売機は、ランダムジュースと書かれている。名のとおり何が出るか本当にお楽しみらしい。1回100円。

「面白そうね、直人あんたも買いなさい」

「そのつもり」

百円を入れて、何が出てきたか見る。

「キャベツジュース？」

「あはは！ なにそれ、キャベツって何？ せめて青汁にしなさいよねー！」

大爆笑する、花音。

「次はお前の番な、ほれ百円」

ありがと、と花音がいい。百円を自動販売機へと入れる。

「何が出たよ」

「……ジャガイモとこんにやく合わせだつて」

「なんだそれ！ ジュースじゃねえよな、食べ物かよ！」

俺も大爆笑。花音が当てたやつも一応はジュースなのだが……

「じゃ、飲んでみますか」

俺と花音は同時に一口飲む。

「どうだった……？」

花音が聞く。

「キャベツを液体にしたなこれ……飲めるもんじゃねえよ。そういつ花音は？」

「じゃがいも？ こんにやく？ でもジュース」

「いや、分けわかんないし。ちょっと飲ませて」

花音からジュースを奪うと、一口もらう。

「うわっ何だよこれ、ホントまじーな。飲めるもんじゃねえな」
「……」

「花音、どしたそんなにまじかったか？」

「あっ、いや、別に大丈夫だよ」

上の空で答える花音。

どしたんだろう？

二人とも時間はかけたがジュースは最後まで飲みほした。

そろそろ、書いてあつた時間だな。

「さあ、面白いものが見れるって場所へ行きますか」

俺達は、食堂へとたどり着く。

食堂で何があるかは、本当に俺にもわからない。

「何が面白いの、見当たらないね」

花音が周りを見回しながら言う。

「いや、どう考えても、あれだろ」

俺が指を指したほうには神谷がいた。どうやら神谷は女の子から告白を受けているらしい。

でも感じから読み取って、神谷が女の子の告白を断っているな、あれ。だって女の子泣いてるし。

女の子は、走ってこの場から立ち去った。

「おやおや、これはこれは、神谷君ではないか」

「おまえは、名瀬と花澤か。どうしてここにいるんだ」

睨みながら言ってくる。

「怖い怖い。俺達がなぜここにいるか、それは聞かないでくれ。でもさ神谷さん同じ寮の仲間じゃないか、仲良くやろっぜ」

「すまんが、そついうのは苦手だ」

「まあねー、初めて会った同士だからね、緊張するのは分かるよー。俺もそつ」

「お前のどこが緊張してるんだ、俺はもう帰る」

帰ろうとする、神谷。

「なあ、どうして今日ここに来たのに、いきなり告白受けてんだ？」

「お前には、関係ない」

そついって、神谷は食堂から出て行った。

うーん、やっぱり答えてくれなかったか。

「さあ、俺達も帰るか」

「そつね」

俺と花音は、学校を出る。

「ねえ、直人。あんまり面白い物見れなかったよね」

寮へと戻っていく中での会話。

「そんなこと無いぜ、あれやなんか隠してるから、そこを暴き出して……神谷のお坊ちゃまを……ぐへへ」

「だらしのない顔しちゃって。その神谷くんをどうするの?」

「決まってるだろ、情報を手に入れて脅す」

「そんな堂々と脅すって言われても、ぼこぼこにされるわよ」

「俺は殴り合いは弱い! でもな喧嘩なんてな、相手の弱みを握れば楽勝なんだよ」

そう、相手が俺に楯突く事ができないほど。

見栄っ張り

嘘

騙し

脅し

正直に言っただけしか持ってねえよな。でもそれで何とかできちゃうのが俺なんだよな。

そんな会話をしていると、寮へと着いた。

「じゃ、明日なお休み」

「うん、お休み」

俺と花音は自分の部屋へと帰っていく。

部屋へと帰り、すぐに眠りについた

9の秘密 入学式当日編

今日は、入学式。誰もがどきどきと不安で迎えることだろう。

目覚ましが部屋に響き渡る。

「朝かぁ……………」

目覚ましを止めて、ベットから起き上がる。

今日から一人暮らしか、いろいろと自分でやらないとな。

起き上がって、身支度を済ませて、食堂へと向かう。

食堂へ行けば、奈央先生の朝ごはんを食べれるなんて朝からついてるな。

食堂へと付くと、桐島さんが居た。

「桐島さんおはようございます」

「苗木君おはよ。早いわね」

「ええ、奈央先生のご飯が食べれるから早くここに来てしまいましたよ」

そう、と言う桐島さん。

「新しい学校生活、楽しみですね」

「ええ、楽しみね。苗木君は、何部に入るの？」

直人にもこんなような事聞かれたな。実は俺のことに興味あるのかな、そんなはず無いよな。

「んーん。今のところ考えていませんね」

「そつそつ、なら苗木君がもし入るものが無かったら、文芸部に入らないかしら？」

「文芸部ですか、小説を書いたりする、あれですよね」

「そつよ」

表情を一切変えずに、無表情で話す。

「でも、俺小説なんて書いたことないですし」

「私を手取り足取り教えてあげるわ」

「心遣い本当にありがとうございます。文芸部ですか、考えておきますね」

「ええ、そうしてくれると、うれしいわ」

やっぱり、無表情で言う。うれしそうなら顔しなければ、悲しそうなら顔もしない。

そんな会話をしていると、ほかの人たちが来た。

「おはよう。徹ちゃん、それに桐島ちゃんも」

「おはよ、直人」

「おはよう」

桐島さんも、直人に挨拶をする。

しばらくしたら、花澤さんと神谷君が来た。

みんな挨拶を済ませて、自分の席へと付く。なんだか二日目で自分の席のようになってきた。

「みなさーん、料理を運ぶのを手伝ってくださいーい！」

キッチンから、奈央先生の声が響き渡る。

俺達全員は、キッチンの中へと入っていく。

今日の朝ごはんは、ご飯にお味噌汁お魚にサラダにその他いろいろだ。

「これこそが日本の朝食ですね！」

「わかつたら、飯運べよ」

直人に注意されて、決められたおかずをテーブルへと運ぶ。

「みなさん、ありがとうございました」

奈央先生が言う。

「ふう、やっと朝ごはんか」

「直人は何もやってないだろ」

「何を言ってるんだよ、しっかりやってたぜ、つまみ食い」

「何やってんだよ」

「別にいいですよ、たくさんありますからね。それでは、いただきますか」

「いっただきまーす」

奈央先生の一言で、みんなが食べはじめ。

「おいしいです!」

「ありがとうございます」

俺が感想を述べて、先生が感謝する。

今日から一年生ということで、みんなとたくさんのお話をし、ご飯が終わった。

「ご馳走様と、みんなでいい終わり。食器を持っていく。」

奈央先生は、教師ということで、俺達より先に学校行っている。

お皿洗いを女性陣がやってくれて、俺達は、少し話しながら、登校の時間まで待つ。

「そろそろ、出て行ったほうがいいかな」

時間を見た、花澤さんが言う。

「そつだな、そんじゃ行こっか。徹ちゃん花音」

神谷君と桐島さんは、すぐに学校へ行ってしまった。神谷君は食事が終わって直ぐに、桐島さんは皿洗いを終わらせて直ぐに出て行く。俺達は少し時間があつたため、のんびりしていくことにした。

「そつだね、そろそろだね」

学校へと向かう。

これから、本当に俺の3年間が始まるのか、少しは不安だらけだったけど、昨日ここへ来て、みんなに出会って確信した、もう不安は無い。

10の秘密 入学式当日編

俺と直人と花澤さんは、自分達のクラス、1年3組へとやって来た。直人のせいで俺達のクラスはもう分かっていたから、すらすら来ることができた。

「ここで、いいんだよな？」

俺がクラスの扉の前で言う。

妙に緊張する。

「そうそう、だから早く入ろうぜ」

俺達は、教室の扉を開けて、中へと入っていく。

中は、やはり静かで、大体の生徒が席に座って、静かに待っている。

俺達は、黒板の前に張ってある、席順を見て席へと座る。

俺の席が教室の一番左隅その左に桐島さん、僕の前に直人その左に花澤さん、直人の前に神谷君が座っている。

「どんだけ、身内が揃ってる席だよ！」

どう見てもこれは直人が手を下しているだろ、さらに隣の席の人も的確に選んでるよ。

「なんだよ、徹ちゃん嬉しくないのか？ 桐島さん隣だよ」

「いや、嬉しいよ。すごくうれしいよ！ でもほかのクラスの人とも仲良くしないと」

「なんて、素直な徹ちゃん。分かりやす過ぎるよ。でも別にいいんだよ、今から徹ちゃんの席を桐島さんから一番遠い席に変えても、それだと、学校で話せなくなるんだよ。それでもいいの？」

「すみませんでした、直人様。この席にしてくださいありがとうございます」

「なーんだ、わかってるなら、いいんだよ」

しばらくして、教室には、生徒が全員来たらしい。次の指示がないため俺達は、話すしかなかった。

そこから、何分経ったかわからないが教室の扉が開く。これにより、中にいた生徒は皆黙った。

教室に入ってきた人は、奈央先生だった。

奈央先生は、黒板の前までやってきた。

「えー、初めまして。今年一年、皆さんの担任になりました、桜井奈央です。よろしくお願いします」

「奈央先生ー徹ちゃんが物凄くニヤニヤしてます」

直人が奈央先生に言う。

「名瀬さん、学校では桜井先生と呼んでください、それと苗木さんしっかりしてくださいよ」

「へーい」

「すみません」

「それでは、今から体育館へと移動してもらいます」

俺達はクラスを出て、この棟から離れた体育館へと急ぐ。

体育館へとついた俺は驚愕した。広いにもほどがあった、中学までの体育館が5つ分ぐらいあるのではないかと言っぐぐらいの広さである。

そこに、俺達のクラス以外の人たちも集まり始める、準備されていた、パイプ椅子に座り、校長のながーーーーーい話を聞く。

今ので、どのくらい長いかは伝わったと思うけど、尋常じゃないほどですからね。そんなこと話さなくてもいいだろというほど話していた。直人なんてすでにこの場にいないという……

やっとのことで解放されて、教室へと帰ってきた。

「というわけですから、これから皆さん一年間一緒に頑張りますよ」

クラスに戻ってきて、奈央先生のありがたい良い話を聞くことになった。

クラスの連中が思いのままに返事をする。

落ち着いた所で奈央先生が話す。

「それでは、今日はここまでです。今から皆さんは自由行動です、

部活どう見ても構いませんし、クラスのこと仲良くするのも構いません」

そう言うと、他の連中も席を立つ。

「直人はこれからどうするんだ？」

「クラスの奴らと親睦を深めてくるぜ」

「なんか裏あんのか？」

「うらああああ？ 徹お前失礼な奴だな、クラスの奴らと仲良くするのになんで裏があんだよお」

「だって直人顔がいかにも悪いことをするような、顔だから」

「！？ ばれたのか、徹ちゃん君名探偵？」

今の直人の顔は本当に分かりやすかった。どす黒い顔だよ。

「剣道部に行かなくていいのかよ、剣道部にはいるんだろ？」

「そんなのいつでもできるよ、それより今は情報だよ情報」

直人は、クラスの人たちのもとへ走っていく。

いや、情報って言うてるし……

俺はどうしよっかな、これと言って決めた部活どうって無いんだよな。

「苗木さん、少しいいですか？」

廊下先の奈央先生に呼ばれる。

「どうしたんですか？」

廊下先まで歩いてきた。

「苗木君は部活決まりましたか？」

「まだですね……でも入ろうとしているのはあります」

「……そうですか　私今年からできた、剣道部の顧問になってたんで、もしよかったらと思ひまして」

「剣道部ですか　直人が入ろうとしてましたよ、俺も考えておきます」

「そうなんですか、ありがとございます」

俺は軽く礼をしてその場を離れる。

直人奈央先生が顧問だつて分かつて言つてたな。

でも、剣道部には入るつもりはない　入りたくない。

もし俺が、また剣道をしてみたいというときは、来るのであろうか。

11の秘密 入学式当日編

自分の席へと戻り、桐島さんに話しあける。

「あのー、桐島さんって文芸部に行かないんですか？」

「行くわよ。苗木君はどうするの、文芸部に入るの？」

「俺は……俺文芸部に入ります！」

「そう、一緒にがんばりましょうね。そして、書道部に勝ちましょうね」

「はっはい」

その桐島さんの笑顔はまだ二日しか一緒にいないけど、始めてみた見た。

可愛い……いつも冷静な桐島さんがこんな笑顔をするなんて。

それにしても、文芸部って小説を書くんだよな、俺書けるかな？

「苗木君、もしかして文を書くのが不安なの？」

「えっああ、まあそうですね」

「大丈夫、苗木君私が一から教えてあげるわ」

桐島さんが、一から教えてくれる！？

「是非……！」

「それじゃ、来週から部活が始まるから、明日から練習しましょう」
「はい……！」

練習って何やるのかな、もしかして大変なことに！？……なる

わけ無いよな、桐島さんはとても真面目だからね。それにしても練習かどんなんだろうな、夕焼けに向かって走れっ！とかそういう体育系だったら面白いのにな　実際は書き方とか教えてくれるんだろうな。

今から、文芸部に行ってみるかな、どんな感じなのか見てみたいし。

迷わずに部活動の部屋へとやって来た　事前に地図が書いてある紙をもらえるから、迷わなかったんだけどね。

「そんで着いて、図書室。」

本がたくさんそろってるから、図書室でやるのかな。

「失礼します。部活動の見学させてください」

図書室のドアを開けて、中へ入る。

「おおー、見学？　いいよいいよ、こっちおいで！」

少し、ハスキー気味の元気な声の女性の声がする。

少し、奥から聞こえる。

奥？

少し歩いていくと、丸い机があり、そこで座っている。座っているのは、女子生徒が三人いる。

女の子多いなあ。

「見学者ですか？　どうぞ何も無いところですが見ていってくださいね」

すごく穏やかな声で、言う女の子。髪が長くとてもきれいな髪をしている。

「先輩達が何もしないから何も無いんですよ！」

最後の一人の女子生徒が、たぶん後輩らしいいきひとが二人の先輩に言う。

実際に作業していると思われる人は、一人しかいない。ほかの二人は、作業をしていないと見える。

「私はここ、文芸部の部長、三年のこしみずあひ清水愛だよ、よろしくね、新入生君」

ハスキー声の女の子の人が挨拶してくれる。

俺もよろしくお願いします、という。

「私も三年の風舞かせまいりん凜です、よろしくね」

穏やかな声の持ち主の風舞先輩も挨拶してくれる。

俺も挨拶し返す。

「私は2年の安里あさと香奈かなです。先輩がこんな人たちだから、大変だと思っわよ。文芸部でいいの？」

安里という人はこの二人の後輩らしく、でも信頼となんていうか、なんていうか、尊敬しているような感じが分かる。

「なんだよ、香奈ったら私達で大変ってどういうことだ？」

「きよとばどうりえすよお（言葉通りですよお）」

「そんな悪いことを言ったのは、この口かこの！」

安里先輩は、小清水先輩にほつぺたをすごく伸ばされて、しゃべりすらそつだ。

なんだかすごく落ち着くな。

「こらあ、愛、香奈をいじめちあ駄目だよ」

風舞先輩は小清水先輩をとめる。そして手を離す小清水先輩。

「ふええ、痛いですよ、愛先輩」

「そんな口の悪いように育てた覚えはありません！」

「愛先輩に育てられた覚えはありません！」

「こらこら、二人ともそこまでよ。新入生君がすごく困ってるから。ところで君の名前は？」

小清水先輩と安里先輩は、風舞先輩に注意を受、けて、俺のほうを向く。

この部活とつてもなかいいな。なんだか羨ましいな

「はじめまして、一年の苗木徹です。小説など、書いたことなんです。興味があるので入りたいと思っています」

「そかそか、よろしくね。苗木君。これでこれからの文芸部は安泰だね、男子部員がついに来たな」

愛先輩が言う。

「あれ、男子部員って俺一人なんですか？」

「そうよ、今年は苗木さんが一人だと思われますよ」

そうなんだ、俺一人なのか　　とっても楽しそうな、部活動
ができそうだ！

「他にも三人くらい一年生が来ましたよ、他の子もいい子で可愛かったよ」

香奈先輩が笑顔で俺に言うてくる。

「そ、そうなんですか。それは楽しみです」

「とっても素直ね。苗木さん部活を体験していきますか？」

風舞先輩が勧めてくれる。

どうしょっかな、体験してみようかな……今日はもう寮に戻ろっかな、桐島さんが教えてくれるって行ってたし。時間帯的にいい頃か。

「本当にありがたいですが、もうひとり文芸部に入る人がいて、その人に小説について教えてもらう約束があるので、今日は帰りたいと思います」

「そう、勉強熱心だね。いいことだ！」

小清水先輩がほめてくれる。

「それじゃ、失礼します」

図書室を後にする。

12の秘密 桐島さんと勉強編

自分の寮へと帰ってきた。

桐島さんとの勉強ってたぶん、夕食食べ終えたからだと思っな…
…まだ少し夕飯まで時間あるな。

のんびり時間まで過ごすかな。

キッチンへ行き、コーヒーを注いでのんびりと。

「そう言えば、兄貴も全寮制の学校だったよな……」

なんで兄貴の事思い出いたんだろう、殺意が沸くな……

兄貴に殺意が沸く理由は、俺に溺愛しすぎなんだよ！

これは、兄貴が中3俺が中2の頃の話だと思う。

「徹くんは何でもできるんだな、さすが俺の弟！ 本当に可愛いっ
！」

「黙れよっ兄貴っ！ くっ付くな……！」

俺の腰を兄貴の腕が回って離れることができねえ。どんだけ力強いんだよ

「俺は徹君だけいれば、この世界なんて要らないと思ってるからね」

「そんな気持ち悪いほど、重い言葉を吐いてんじゃねえ！」

「そんな！？ 徹君はお兄ちゃんのこと嫌いなのか？」

「ああ、大嫌いだ！！」

「でた、徹君のツンデレ」

「そんな、言葉知らん！」

「もうっ、徹くんかわいい！」

こいつは俺の実の兄、苗木大河俺とは1つ年上。なえきたいがこいつは、俺と比べて本当に何でもできる、運動もできるし、頭もかなりいいでも、俺に対して溺愛すぎるから、気持ち悪い！ そんな兄貴も今どこかにいるんだろうな。死ねばいいのに！

「これから、三年間徹君に会えないなんて……！？ お兄ちゃん耐えれない！ 無理だよ！ 徹ちゃん禁断症がでちゃうよ！」

たぶんこれは、兄貴が高校に行くから家に帰ってこなくなる時だな。あいつ本当にしつこかったな、今あいつどこの学校なんだろうな。

「黙れっ！ さっさと行ってこい！」

「ガハツア！ いいストレートだ徹くん、さあもっとお兄ちゃんを殴れ！」

俺の右ストレートが兄貴のみぞおちへと入る。

こいつは真性の変態！

「気持ち悪いこと言うな！ このくそ兄貴！」

「ブファ！ いいすね蹴りだ、でもお兄ちゃん今のは少し痛かったかな」

少し涙目の兄貴。言いざまだっ！

俺はこいつに対してだけ、暴力を振るうって決めてんだ、それ以外には極力振るわない！

あと変なのは、親父もだっ たな親父も兄貴と同類だ。

もういやだ、こんな家族。でも育ててもらった恩は返したい
と思ってる。

そう言えば、明日は確か学生会の発表って言ってたな。この学園の学生会や生徒会などいろいろな呼び方があるが、その学生会と言うのは、この学園のそれなりにえらい立場らしい。

なんて考えてると、夕飯の時間か。

その後の俺達は、みんなで楽しく食事をした。

直人がなんか一人で話している感じだったが、それはそれでいい
と思っていた。

夕食が終わって、ひと段落をして自分お部屋へと戻ってきたら、
ドアのインターホンがなる。

「開いてますよ」

「こんばんわ」

俺の部屋に桐島さんがやって来た。

「あつ、桐島さんお願いします」
「ええ、一緒にがんばりましょう。それでは早速はじめるわね、えつと机借りるわね」

俺と桐島さんは、一つの勉強机を二人で使うような形である。

「それでは始めるわ。苗木君あなたは、どのような小説が書きたいの？」

「どのようなって……？」

「恋愛やファンタジー、ジャンルなんていくらでもあるわ」

「そ、それじゃ学園もので書いてみたいですね」

「そう、いいと思うわ。どのジャンルにも挑戦してみるといいわ。でもなんで学園系なの？」

俺が学園ものを選んだ理由は。

「俺この学校で感じたことや思ったことを書いてみようかなと、思っていますね」

「そう、すごいわね。良いのが書けるといいわね、でもそうになると今は何も書けないわね　もう少し学校生活が始まったら詳しく書き始めましょうか」

「えつ、書く練習はしないんですか？」

「ええ、書くものが決まっていれば、直ぐにできるわ、でもいろいろと考えることはあるけど、それはまた今度でいいわ、今日は終わり。また明日にしましょう」

「明日もいいんですか？」

「そのつもりだけ」

もしかして……俺桐島さんに好意をもたれているのか！？

そう考えるとどうも、意識してしまう！　駄目だ普通を装え！

「どうしたの苗木くん、顔赤いわよ？」

「あっ、いや、これは、なんでもないです！」

「そうなの、なんでもないならいいけど」

駄目あああ、完璧に意識し始めてるよ俺！ 今の受け答えも挙動不審すぎるだろ、俺！

一回落ち着こう、すってーはいてー。ふう、少しは落ち着けたかな。

「そういえば桐島さん、俺今日文芸部見てきましたよ」

「そうなの、どうだった？」

「えっとー、女の子しか居ないらしいですよ」

「そう……よかったわね」

「あっ、はい」

桐島さんのものすごく睨みながら言ってくるよ。

なんだ今の悪寒は！？ 背筋がこうなんていうか、ヒヤッと来る感じ！

桐島さんは俺の部屋から出て行った。

どうしたんだろ、桐島さん。すごく不機嫌だったな。

13の秘密 学生会編

「とおるちゃん朝ですよー！」

「んっ、もう少し、あと五分」

「そんなべたな、言い訳してると、いたずらしちゃうよ」

目を開けてみると、目の前に直人が居た。なんでこいつが俺の部屋にいるんだよ。

「一応聞いておく、なんで直人が俺の部屋に来て、起こしに来ているんだよ？」

「どう、俺が幼馴染だったらもっとうれしい？」

綺麗に無視しやがったな。

「うれしくない！」

「ひっどいなあー、俺がせっかく合鍵を作って、入ってきたのに」

「返せ！」

「はい？」

「かぎ返せ！」

「鍵？ なにそれおいしいの？」

「……直人が手に持ってるそれだ」

「あっこれどうぞ」

直人は以外にもあっさりと鍵を返してくれる。

あれ、こんなにあっさり返してくれるんだ。怪しすぎるだろ。

階段を下りて食堂へと向かう。

そこから食事を食べ終えて、学校へ行く。

学校へ行くのは、やはり俺と直人と花澤さんで登校する。やっぱり、桐島さんと神谷君と一緒に行けなかったな。

「みんなで一緒に学校行きたいよね」

俺が言う。

「いやいや！ 無理だろだってあの二人だけ、神谷とかもろ不良だし桐島とかぜってー話しても、そうね、しかいわねーよ！」

「そんなことないと思うけどな」

「なんで、そんなにかばうんだよ。なんだ昨日の夜なんかあったか？」

「なッなんもないよ！」

直人に知られたらまずい！

教室に入ると人数はすごく少なく、黒板に来た人から体育館集合と書いてあった。

「体育館だつて行くつぜ」

俺たちは体育館へと向かった。

「うわっ、すっげー人だな」

直人が唾然としていた。

「なんだよ、昨日見ただろ」

「昨日俺さぼったからしらねーんだよ」

「えっ、昨日直人いなかったの？」

「徹ちゃん俺その言葉すっげー傷つくよ？」

居なかったんだ、どこにいたんだろ？

「新入生の共だまれえええええ！ あっ徹君以外ね」

マイク越しに聞いたことがある声。

なんだこの寒気は！？

「こら、大河君そんな言い方すると怖がらせちゃうでしょ」

「だってうるさいんだもん！

「言い方ってものがあるでしょ！」

女性の声も聞こえる。

こいつもしかして……！？ いやな予感しかしねえ！

俺たちの前の舞台から二人の人が出てきた。それを見て俺は殺意がわいた、兄貴だ。

「ええーみなさん。この桜帝学園へ入学おめでとうございます。私たち二人は生徒会です、こちらが会長の苗木大河会長で私が藤本琴音です。みなさんに過ごしやすい環境を作っていきます。そこで今日は、皆さんの祝いとして、皆さんにゲームをしてもらいます、はい大河君説明を」

「宝探ししてこい貴様ら！ あっ徹君聞いてるー」

「大河君！ちゃんと説明して」

「はい。えっとー今からこの学園に隠されてある、5つのパスワードを探していてください。それで上位何名かに景品プレゼントです」

「補足として説明しますね、この学園のアリとあらゆる場所にこの紙が置いてあります、その紙に書いてあるクイズを説いて、わかつたらここに戻ってきてください。それじゃ始めます、よいドン！」

体育館に居た生徒は全員ここから出ていく。俺はただ呆然として
いる。

なんで兄貴がこの学園に……？ さらに学生会の会長だと！？
どうなつてやがる、あいつは天才だでも、それ以上の馬鹿だぞ、そ
んな奴がこの学園の生徒会長。

「おい、どおしたよ徹ちゃん？」

俺がボーとしていたらしく声をかける直人と花澤さん。

「苗木君大丈夫？ ぼーとしてるよ？」

「あいつ……会長俺の兄貴だ……」

「はっ！？ 会長がお前の兄貴？」

「うん」

「そうなのか！？」

「ああ、ごめん。あんな馬鹿兄貴で 先に行つて俺あいつのと

ころ行つてくる！」

俺は走り出し、あの舞台の上へとやつてきた。

「何やってんだよ馬鹿兄貴！」

「その声は徹君!? 来てくれたのお兄ちゃんの元へと来てくれたの?」

兄貴が俺に飛びかかってきたので、回し蹴りを食らわせた。

「うツ! 久しぶりこれ!」

「気持ち悪いんだよ!」

横になって倒れている兄貴の脇腹に蹴りを入れる

「ちよいたつ! 痛いよお兄ちゃん!」

「話を聞かせろくそ兄貴!」

「うん徹君にならなくても話すよ。何が聞きたい女のことこと、それともこの学園のこと?」

「お前が学生会長になってることだ!」

「ああ、なんかなっちゃった」

「なんかって……」

「あなたが徹君?」

副会長と名乗る藤本琴音さんが俺に話しかけてくる。

「ええそうですけど」

「大河君から話はよく かなり聞かせてもらってるわ」

「こんなあほ兄貴ですいません」

頭を下げる。

「いえいえ、それより徹君は、この競技に参加しないの?」

「ああ、そうでした。兄貴が居たんで忘れてました」

「徹君は俺のことをすっかりと覚えていてくれたんだね」

兄貴は本当に気持ち悪く言う。今にも殴り殺してやりたい気分を抑えた。

「黙れよッ！ そんなじゃねえよ、どこぞのあほ兄貴が学生会長ともなれば、この競技自体忘れてたよ」

みぞおちに肘をあてながら言う。

「そか、そうだよな。びつくりしたよね。でもね徹君……」

兄貴の顔つきが変わった。

「大河君！？ 徹君に言うの？」

藤本さんが驚くようにいう。

兄貴がいつもの調子ではなく真剣の表情だ。

あの兄貴がこんなに真剣な表情……あの時以来見たことがない。

「琴音、もしかしたら徹君が例の計画のすべてを終わらせてくれる人かもしれないだよ！」

「でも、今は時期が早すぎるわ！」

藤本さんが声を荒げる。

「な、なんの話だよ」

俺が聞いてみる。

「……ごめん徹君今は言えそうにないや、時期が来たら言うよ」

兄貴が少し考えた結果言わないという答えを出した。

「時期つてなんだよ、兄貴！」

なんだよ、例の計画？ 俺が終わらせる？ 意味がわかんね。

「ごめん、またね徹君、俺はいつでも学生室にいるから」

それだけ言つて藤本さんと兄貴は俺の前から居なくなつた。

なんだつたんだよ……意味がわかんね。

14の秘密 学生会編

兄貴は俺の前から姿を消して俺は一人残されてしまった。どうすればいいんだって言うんだよ、クソッ！不安という感情が俺の中に生まれた。

「はあ、どうすればいいんだよ。兄貴何が言いたいんだよ、俺にはまだ言えないってのかよ」
「とおるちゃん」

兄貴とすれ違いに直人と花澤さんが帰ってきた。

「どうした。直人？」

「体育館が閉まっててさ、入れなかったんだぜ！ 徹を探しに来たのに」

「たぶん兄貴のせいだな」

「兄貴……？ ああ学生会の会長さんか、あの人がやったのか、なら許す！」

「許すって……。あいつがどんなことしたか知らないけど、俺を探してたの？」

「そうそう、回らねえのかなって思ってたね」

「そうだな。回るか」

俺と花澤さんと直人は体育館を後にする。そのあと俺たちは図書室へとやってきた。

「ここに何かあるんだよ？」

俺はゲームの主旨がよくわからないまま来てしまったのでルール

がよくわからない。

「さあ？」

「わからない」

直人と花澤さんが一緒に言う。

わからないのにこのゲームに参加してたんだ。

「じゃどうするんだ？ 景品貰えるんだろ？」

「景品か……魅了のだけどな、なんかもう動きたくねえな」

直人が図書室の椅子に座る。

「えっ直人もうやめるの!？」

花澤さんが驚き直人に言う。

「うん。ひとつ行きたい場所があるから」

直人がウインクをして言う。

行きたい場所？

直人に連れられてきた場所は

「パソコン室？」

花澤が言う。

俺たちが連れてこられた場所は、パソコン室であった。

「なんでここなんだよ。ここに何かあるのか？」

俺が直人に聞く。

「この職員用のパソコンにこの学校の全校生徒の個人情報が入ってるパソコンがあるらしいんだ。だからそれを取りに来ました」

「いや取りに来ましたじゃねえよ！ だからそういうのは犯罪だからな」

「大丈夫、完全犯罪にするから」

「そういう問題じゃねえよ！」

「だから徹ちちゃんと花音は前と後ろの玄関見といてね」

「話聞けよ」

俺と花澤さんは呆れてパソコン室の外へと出て見張りを始める。

むしろ見張りをしてるほうがいかにも何かしてますよと勘違いされそうなんだけどな。

それから15分後。

「終わったぜー」

扉から直人が出てきた。

「はやっ!?!」

「そうか？ さてとやることも終えたいし教室行きますか。」

俺たちはこの競技を全くやらずに教室で話をして終わった。

15の秘密 部活動始動!

新人生歓迎という会があつてから一週間今日から部活動が始まる。俺は文芸部へと入部届けを出し、今日から部活動が始まる。この前であつた三人の先輩たちとも仲よくしていきたいな。

「どうしたー徹? ものすごく顔がゆるんどござ」

直人と花澤さんが二人揃つて話しかけてきた。

「えっそんなに緩んでた?」

「うん。ものすごくだよ、例えば三人の先輩と仲良くできるから楽しみだなっていう顔してた」

「断じてそんなことを考えてないよ!」

決してそんな事は思つてないぞ!

「徹ちゃん文芸部だろ、桐嶋と一緒に行けばいいじゃないか?」

桐嶋さんのほうを見ると、今準備が終わり図書室へと行くこうとしていたところであつた。

「あのー桐嶋さん。一緒に図書室に行かない?」

「行かないわ」

「えっあつそうですか。ならまたあとで……」

桐嶋さんは教室から出ていく。

「振られたな」

「うん。苗木君振られたね」
「……」

シヨックのあまり呆然と立ち尽くしている。

「それより、直人と花澤さんは何の部活に入ったの？」
「あつ、動いた。五分くらい止まってたよ」
「うん。もう大丈夫、桐島さん用事あったんだよ」
「都合のいい脳だな。俺は剣道部に入ったよ」
「私は剣道部マネージャーだよ」

剣道部って奈央先生が顧問の部活かいいな……。

「本当に直人って剣道やってたの？」
「俺は小学校からずっとやってんぞ？」
「ほんと、花澤さん？」
「うん、本当だよ。私は小学校で辞めちゃたけどね」
「なんで徹ちゃん俺を信じないの？」
「直人だから？」
「……」
「あーあ、直人が凹んでるよ」

花澤さんが直人の背中をさすっている。
直人メンタル弱すぎだろ！

『1年3組苗木徹君学生会室に来てください』

突然校内放送で呼び出された。
藤本さんの声だ。

「苗木君なんかやったの？」

「いや、たぶん兄貴が用もなく俺を呼んだんだと思う」

「そういえば会長さんは苗木君のお兄さんだったね」

「そう、だからなんの用件もないのに呼んでると思う」

俺は教室を後に学生会室へと向かう。

「失礼します。苗木です」

「徹君来てくれたんだ！」

兄貴がドアまで来る。

「いや、兄貴が呼んだんだろ！ 全校放送されればだれでも来るわ
！」

「ごめんね徹君。大河君も用が無くて呼んだわけじゃないのよ。さ
あここに座って」

俺が席に座り、琴音さんがお茶を入れて持ってきてくれた。

「ありがとうございます。それでどうしたんですか、琴音さん？」

お茶を啜りながら琴音さんに聞く。

「それがね……こちら側の人間としては、すごく言いにくいんだけど
ど 徹君次の学生会に立候補してみない？」

「学生会に俺が？」

「ええ。実は今の学生会は私と大河君とあともう一人の三人でやって
いるのよ、今年も私たち3人はやることは決まってるの、それで
こちら 学生会側からの推薦なんておかしいんだけど、徹君やっ
てみない？」

俺がこの学園を引っ張っていく存在になっっていくのか？

「でも、まだ入学して全然日が経ってませんよ。それに俺がやらなくてもだれかが立候補するかも知れないじゃないですか？」

「……」

俺の言葉に琴音さんが黙りこんでしまった。

俺がやる理由があるのか？

兄貴が会長でこの学園が壊れていないんだ、俺がやらなくてもだれでもできる。

「徹君じゃなきゃ駄目なんだよ」

兄貴が琴音さんをフォローするように言う。

「何が俺しかできないだ、兄貴」

「徹君にしかできないよ。俺がこの学園の学生会にいるなら徹君が学生会にいてくれないと駄目なんだ」

「その意味がわからないんだよ！ 兄貴が会長だから俺が学生会に入る？ なんでなんだよ！」

兄貴と琴音さんが理由をはっきり言ってくれないため、俺は怒鳴ってしまった。

「徹君が文芸部に入るんだろ、そしてあの桐島と書道部に負けないくらいの力を手に入れようとしているんだろ？」

兄貴が部活に対する質問をしてきた。さらに俺のことではなく桐島さんのことも。

「俺が文芸部に入るのなんで知ってるんだよ？」

「徹君仮にも俺は学生会会長だよ、この学園の情報なら大体わかるよ、大体ね」

「そうだよ、俺は桐島さんと文芸部に入る。力って何なのかわからないが、俺は3年間頑張るつもりだよ、兄貴」

「お兄ちゃんとして、かわいい弟の部活は応援したいけど、文芸部か……」

「文芸部が何かあるのか？」

兄貴がすごく言いにくそうにしている。

昔はすぱっと何事も言う兄貴のイメージは、この学園に入りそのイメージは崩れていった。

「いや、何も無いよ。頑張ってたね文芸部」

結局文芸部のことは何も言わなかった。

「ごめんね、徹君。用件は言ったから、部活に行っていよいよ」

俺は席を立ち扉を出て生徒会室を後にする。

扉に出たところには、いつの間にか居なかった琴音さんが居た。

「徹君……あなたはこちら側の人間ということだけ、覚えていてね」

琴音さんは学生会室へと入っていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2894q/>

桜帝学園の秘密

2011年10月7日14時01分発行